

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2007～2009

課題番号：19330188

研究課題名（和文）学生の認知的・情緒的成長を支える高等教育の国際比較研究

研究課題名（英文）Comparative Study of College Impact Theory and Student Development

研究代表者

山田 礼子（YAMADA REIKO）

同志社大学・社会学部・教授

研究者番号：90288986

研究成果の概要（和文）：

本研究は平成16～18年度の基盤研究で得られた知見、「大学の環境と学生の成長」を国際比較の視点から、転換期の大学における学生の教育評価を、学習成果の達成にのみ焦点化するのではなく、現在の学生の家庭環境、経てきた学習背景、若者文化等が及ぼす影響を解明し、その上で大学での学習における学習意欲、動機づけ、学習態度や習慣などの情緒的な要因を向上させることにつながる教育評価の開発をおこなう。そうした目的をメンバーで共有しながら、この3年間に新入生調査（JFS2008、2009）を約28000人以上、上級生調査（JCSS2007、JCSS2009）を約10000人以上に実施し、研究分担者、協力者とともに、データを分析、研究するだけでなく、データを各参加大学に返却することを通じて、各大学の教育改善につなげていただくというIRの基礎を構築する試みもおこなった。本研究を通じての問題意識は、メンバーそれぞれが研究会での発表や学生調査のデータを共有しながら、共同研究を重ね、学会で発表することを通じてより鮮明になった。学生調査の分析・解析を通じて、カレッジ・インパクト研究の理論構築と学生の大学における成長過程の知見を得た。

研究成果の概要（英文）：

Teaching and learning issues have been widely discussed in higher education institutions but usually from a single institution perspective. Benchmarking efforts that allow institutions to compare data have enriched the conversations by allowing cross institutional comparisons, but it could be argued that most universities operate in a shared national environment so that variations among institutions are still limited to a degree. Also, accumulation of longitudinal data of students and analysis of these data will be able to contribute on quality and quantity of student research in Japan.

This study provides a comparison of student outcomes from two higher education systems that operate in different cultural and structural contexts – American and Japanese higher education. The American perspective is developed through findings from the College Senior Survey (CSS) from UCLA's Higher Education Research Institute. The Japanese perspective is developed through findings from the Japanese College Student Survey (JCSS) developed.

Together, these data represent thousands of current college students and provide a summary of the learning and experiences of college students. The descriptive analysis shows that US students spend more time in learning activities outside class than Japanese students and show higher evaluation of learning outcome and self-evaluation for their abilities and skills than Japanese students. Analysis of JCSS2005 data confirms that affective fulfillment of students is closely associated with student engagement and the satisfaction toward quality of teaching and learning determines the satisfaction for college experiences. The results of the study suggest that development of effective pedagogy and faculty's involvement are indispensable for enhancing teaching and learning. In the changing environment of Japanese higher education, this study confirms the effectiveness of college impact theory which has been conditionally accepted in Japan. However, it is expected that accumulation and analysis of student data contributes on the improvement of program reform of each higher education institution and policy making process.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	4,500,000	1,350,000	5,850,000
2008年度	5,100,000	1,530,000	6,630,000
2009年度	4,500,000	1,350,000	5,850,000
年度			
年度			
総計	14,100,000	4,230,000	18,330,000

研究分野：教育・心理

科研費の分科・細目：教育社会学

キーワード：学生調査 アセスメント アウトカム 機関研究（IR）国際比較調査 教育評価

1. 研究開始当初の背景

主題「学生の認知的・情緒的成長を支える高等教育の国際比較研究」は、高等教育のユニバーサル化が進展する欧米と日本の大学生に見られる共通項および差異を把握することにより、学生の認知的、情緒的成長を支えるカリキュラムや教授法を包含する教育基盤を比較研究によって明確にすることを目的としている。本研究の土台となる研究は、平成16年より18年までの3年間にわたって実施してきた科学研究費基盤研究（B）「転換期の高等教育における学生の教育評価の開発に関する国際比較研究」である。平成16年に着手した本研究では、転換期の大学における学生の教育評価を、学習成果の達成にのみ焦点化するのではなく、現在の学生の家庭環境、経てきた学習背景、若者文化等が及ぼす影響を解明し、その上で大学での学習における学習意欲、動機づけ、学習態度や習慣などの情緒的な要因を向上させることにつながる教育評価の開発をおこなうことに主眼をおいた。学生の情緒的側面の成長を企図した教育評価の開発にあたり、学生研究の第一人者であるアメリカのカレッジ・インパクト理論とそれを具現化したI-E-Oモデルに依拠した。成果は具体的には学生の成績や学習成果、学位取得に相当する。インプットは学生の既得情報と言い換えられ、環境は学生が教育課程のなかでの経験全般にまとめられる。学生の成果は知識の習得や知識を使って理論付けや論理構成などができるという認知面（cognitive）と感情、態度、価値観、信念、自己概念、期待感や社会的および人的相互関係の構築に関連するような情緒面（affective、もしくは

non-cognitive)に分類できると認識されている。アスティンは一連の研究成果より①学生の学習や発達に学生自身の関与の量と質に比例する。②教育政策、教育実践、教員の学生への関与は学生を関与に導き、成果へとつながる。という関与（involvement）理論を導きだした。本研究では、初年度（16年）には、上記に挙げた情緒的成果を測定可能とする学生調査をアメリカで開発されたCSS（大学生調査）をベースにし、より日本の学生の特質に応じた調査の開発に重点をおいた。試行調査（16年度、14大学、1329人）を経て、平成17年には日本版大学生調査（JCSS）を開発し、8大学3961人を対象に調査をおこなった。本調査の分析においては、認知的成果、情緒的成果に及ぼす環境要因の把握と明確化という目的を基に、I-E-Oモデルをより精緻化したパスカレラのモデルを研究枠組みとし、日本の学生の成果と環境要因の関係を探った。分析結果の知見をまとめると学年、学生の関与、教員の関与というカレッジ・インパクトがもたらす教育効果が検証された。

平成16～18年度研究により、日本の大学生においても、アスティンやパスカレラの研究成果である情緒面・認知面の成果における学生および教員の関与そして大学という環境の及ぼすインパクトの有効性の検証が可能となった。これらの知見はそれまでの日本におけるカレッジ・インパクト研究が明らかにしてこなかったあるいは着目してこなかった大学という環境が学生の成長に及ぼす重要性に視座を与えた先駆的研究であるといえる。かつ3年間の研究においては、実際にアメリカ、カナダ、オーストラリアの大学の訪問調査を実施したことにより、学生の成長を企図する

ようなカリキュラム改革、教授法の改善 (FD) が各国において実施されていることを把握した。

2. 研究の目的

本研究は平成 16～18 年度研究で得られた知見、「大学の環境と学生の成長」を国際比較の視点から①ユニバーサル化の進展している諸国であるアメリカ、オーストラリア、カナダ、日本の大学生を対象に CSS あるいは JCSS 調査の英語版を実施することにより、各国大学生の共通項と差異を明確にし、次に②21 世紀型学生の情緒的・認知的成長を促進するあるいは支える教育環境、すなわち各国の教育カリキュラムや教育方法の機能について検討する。この命題においては、過去の学生研究と国際調査の知見から「21 世紀の高等教育においては、学生の情緒的・認知的成長を促進するために、従来とは異なるカリキュラム改革、および教授法が導入されているのではないか。もしそうであるとするならば、上記の国々においてどのような教育カリキュラムや教授法が実施されているのか。そしてそれらはどのように教育効果をもたらしているのか。」といった仮説と疑問が浮上してくる。本研究は上記の仮説および疑問を解明することが目的である。

3. 研究の方法

(1) アスティン・モデル、パスカレラ・モデルに代表されるカレッジ・インパクト研究に関連する理論研究を引き続き行い、学生の関与と教員の関与の度合い、それを支える制度的側面を、教育基盤 (カリキュラム、教授法等) の構造と機能等に即して解明する。

(2) 理論的研究の進捗と平行して、平成 16～18 年研究で解明した部分をさらに普遍化するために、学生を対象とした「国内調査」と「国際調査」を実施する。国内調査においては、平成 16～18 年研究で明らかになった「個々の大学の学生に対する教育効果の差異」および「学生による教育効果の現れ方の差異」が機関の特徴、教員の関与の違い、学生の関与の度合いといった観点から分析するために、日本版大学生調査 (JCSS) と対応可能な日本版新入生調査 (JCIRP) をカリフォルニア大学ロサンゼルス校にある高等教育研究所 (HERI) の許諾を得て開発し、平成 19 年に実施し、20 年には引き続き日本版大学生調査 (JCSS) を実施する。この調査により、教員の関与、学生の関与を時系列で追跡することができ、平成 16～18 年度研究では明らかにできなかった参加機関毎の教育基盤の個性が学

生の関与に及ぼす影響をより深く解明することをねらいとする。

(3) 「国内学生、国際学生調査」と平行して、米の大学のカリキュラム改革などの事例研究を訪問調査によって明らかにする。以上 (1) (2) (3) の観点を視座に据え、日、米の学生の共通点、差異そして環境と学生の成長との関係性を明確化し、それを支える 21 世紀型教育基盤の像に迫る。

4. 研究成果

平成 19 年度は、以前の科研で開発した JCSS の 2007 年版を開発し、2007 年 11 月から 12 月にかけて 16 大学 (14 大学 4 年制大学、2 短期大学) を対象に 6500 人に実施した。現在、2007 年度版の結果を分析中である。前科研同様に教育評価 (アセスメント) 研究が進んでいるアメリカにおけるアセスメントの現状と課題を把握することで、本研究視角に国際比較の側面を加味するという計画を立てた。この計画をベースに本年度は研究会を 4 回実施し、各研究会において、昨年度実施した学生評価の進行状況、およびそれぞれの研究発表、海外調査報告をおこなった。そのうち 4 回目の研究会では海外から学生調査研究と初年次教育を実施しているジョージア大学のマレンドア博士を招聘して、アメリカの学生調査研究の動向について研究の示唆を得た。また、3 月には本研究の理論の基盤となるカレッジ・インパクト研究の第一人者である元カリフォルニア大学ロサンゼルス校高等教育研究所長アレクサンダーアスティン氏によるシンポジウムを実施し (大学主催のシンポジウムを利用したため費用は大学の経費)、本研究の日本での理論構築と調査基盤の実質化にむけての新たな知見を得た。

研究会の内容は以下の通りである。第一回研究会 (学会発表の打ち合わせと内容報告)、第二回研究会 (2008 年度に実施する予定の新入生調査 (JFS) の内容の検討) 第三回研究会 (引き続き JFS の検討)、第四回研究会 (マレンドア氏を招いての研究会)。

さて、実質的に海外調査では本年度はアメリカ調査を実施した。海外調査については 2 月にカリフォルニア大学ロサンゼルス校高等教育研究所 (HERI) および機関研究部門 (IR) への訪問調査を実施した。

日本での本調査については、第一に 2007 年 12 月までに 16 大学の学生 6500 人を対象に日本版 JCSS 調査 2007 を実施した。なお、カリフォルニア大学ロサンゼルス校高等教育研究所 (HERI) の許諾を得て、日本版新入生調査 (JFS) 2008 を開発し、これについては、

2008年度6月に実施予定である。

5月にはアメリカ機関研究学会（カンサスシティ）で関連した調査内容について発表した。同年6月、9月には「JCSS2005年」の成果をそれぞれ「日本高等教育学会」において研究分担者とともに発表をおこなった。研究代表者による学会発表回数は国際学会を入れると2回、研究会や講演での研究代表者による発表の合計は2007年度5回になる。研究分担者も同様に発表を行っている。

平成20年度は新たに新入生調査（JFS2008）を開発し、2008年6月から7月にかけて163大学を対象に19661人に実施した。現在、2008年度版JFSの結果を分析中である。

前科研同様に教育評価（アセスメント）研究が進んでいるアメリカにおけるアセスメントの現状と課題を把握することで、本研究視角に国際比較的側面を加味するという計画を立てた。この計画をベースに本年度は研究会を4回実施し、各研究会において、昨年度実施した学生評価の進行状況、およびそれぞれの研究発表、海外での発表についての報告もおこなった。

5月にはアメリカ機関研究学会（シアトル）で関連した調査内容について発表したが、この発表においては海外の共同研究者（UCLA HERI ジョン・プライヤー氏）との合同発表となった。同年5月「JCSS2005年・JCSS2007年」の成果を「日本高等教育学会」において課題研究として設定された中で発表を行った。また、10月には国内共同研究者とともに、JCSS2007、JFS2008を用いてIRをどう進めていくかという内容でシンポジウムを同志社大学で開催した。研究代表者による学会発表回数は国際学会を入れると2回、研究会や講演での研究代表者による発表の合計は2007年度5回になる。2008年11月には韓国のヨンセイ大学からの招待を受けて、本研究成果の講演をおこなった。

最も大きな成果としては、科研の研究成果をもとに編著1冊、学会誌での1本の論文発表、査読付き論文2本を発表した。学会発表は課題研究が2回、国際学会での発表が1回、学会での基調講演を1回行った。

なお、本成果をベースにして、同志社大学内に「高等教育・学生研究センター」を設置した。

平成21年度は本研究の最終年度にあたり、JFS2008の分析に関連した研究会を3回実施した。そのうち1回は海外ヨンセイ大学からの共同研究者である、李教授を招聘し、韓国の学生についての内容での研究会となった。6-7月には、JFS2009を約8000人を対象に実施し、

10-11月にはJCSS2009を約4500人を対象に実施した。両調査については現在データがそろい、これから分析に取り掛かる。研究分担者、協力者とともに国内学会（日本高等教育学会、日本教育社会学会）で発表し、海外の学会（AIR）では研究代表者が、UCLAのジョン・プライヤー氏（HERI副所長）との共同発表をおこなった。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計40件）

- ① 木村拓也・山田礼子、「大学生調査から『学士力』を測る」進研アド『Between』2009年冬号、pp. 26-32. 【査読無】.
- ② 木村拓也・西郡大・山田礼子「高大接続情報を踏まえた大学教育効果の測定—潜在クラス分析を用いた追跡調査モデルの提案」日本高等教育学会編『高等教育研究』12号、pp. 189-214、2009年5月、【査読有】.
- ③ 山田礼子「学生の情緒的側面の充実と教育成果、—CSSとJCSS結果分析から—」、広島大学高等教育研究開発センター『大学論集』、pp. 189-214、2009年3月、【査読有】.
- ④ 山田礼子「大学における初年次教育の展開—アメリカと日本—」、国際教育学会機関誌*Journal of Quality Education*、Vol. 2、pp. 157-174、2009年3月、【査読有】.
- ⑤ 山田礼子「初年次教育の組織的展開」、初年次教育学会編『初年次教育学会誌』、第1巻第1号 pp. 65-72、2008年11月、【査読無】.
- ⑥ 山田礼子「学士課程教育とFD:ティーチングとラーニングの相互作用」、『大学評価研究』、7、pp. 17-29、2008年7月、【査読無】.
- ⑦ Reiko Yamada “Learning Outcomes of College Students in Japan: Comparative Analysis between and within Universities”, *Higher Education Forum*, Vol. 5, pp. 125-140. 2008, 【査読有】.
- ⑧ Reiko Yamada “A Comparative Study of Japanese and US First-year Seminars: Examining Differences and Commonalities”, *Research in Higher Education*, Vol. 39, pp. 287-305、2008年3月、【査読有】.

- ⑨ 山田礼子「日本の高等教育機関における初年次教育一拡がり」と教育効果の検討」、『コア・FYE教育ジャーナル』、1、pp. 1-14、2007年、【査読無】。
- ⑩ 山田礼子「大学機関調査からみた日本における初年次教育の可能性と課題」、大学教育学会編『大学教育学会誌』、第29巻第1号、pp. 22-28、2007年、【査読無】。
- ⑪ 山田礼子「初年次教育のための組織体制づくり」、大学教育学会編『大学教育学会誌』、第29巻第1号、pp. 42-47、2007年、2009年度大学教育学会特別賞受賞論文、【査読無】。

[学会発表] (計 15 件)

- ① Reiko Yamada “Analysis of Recent Japanese Higher Education Policy: Toward Teaching and Learning Centered Approach ”, Invited Lecture Seminar at Pohang University of Science and Technology, South Korea, August 27, 2009, 【招待講演】。
- ② 山田礼子「日本の初年次教育の展開—その現状と課題—」、第1回初年次教育学会基調講演、2008年11月29日、玉川大学【招待講演】。
- ③ Reiko Yamada “Comparative Study of Outcome and College Students between the United States and Japan: An Analysis of CSS and JCSS ”, Invited Seminar at Yonsei University, 11/24/2008, 【招待講演】。

[図書] (計 4 件)

- ① 『大学教育を科学する：学生の教育評価の国際比較』山田礼子編著、東信堂、2009年5月、306頁。
- ② 『アメリカの学生獲得戦略』(山田礼子著)、玉川大学出版部、2008年、190頁。
- ③ 『初年次教育ハンドブッカー—学生を「成功」に導くために』 [山田礼子監訳]、丸善、307頁、2007年。

[その他]

ホームページ等

<http://rc-jcirp.doshisha.ac.jp/kaken/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山田 礼子 (YAMADA REIKO)
同志社大学・社会学部・教授
研究者番号：90288986

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者

圓月 勝博 (ENGETSU KATSUHIRO)
同志社大学・文学部・教授
研究者番号：50152004

井上 智義 (INOUE TOMOYOSHI)
同志社大学・社会学部・教授
研究者番号：40151617

吉田 文 (YOSHIDA AYA)
早稲田大学・総合科学学術院・教授
研究者番号：10221475

相原 総一郎 (AIHARA SOICHIRO)
大阪薫英女子短期大学・児童教育学科・教授
研究者番号：30212351

沖 清豪 (OKI KIYOTAKE)
早稲田大学・文学部・准教授
研究者番号：70267433

森 利枝 (MORI RIE)
大学評価・学位授与機構・学位審査研究部・准教授
研究者番号：00271578

杉谷 祐美子 (SUGITANI YUMIKO)
青山学院大学・文学部・専任講師
研究者番号：70308154

渡辺 達雄 (WATANABE TATSUO)
金沢大学・大学教育開発・支援センター・准教授
研究者番号：20397920

木村 拓也 (KIMURA TAKUYA)
長崎大学・アドミッションセンター・助教
研究者番号：40452304